

「ボランティア」について 大木 昭

「そう言われてもボランティアでしているのだから無理だ」。「ボランティアだから「これくらいは気を利かせてやって欲しい」」。「どうせ、ボランティアでやっているんだから・・・」このような声を聞く。

世の中挙げて「福祉」である。その福祉を具現する原動力になるのがボランティアであると思う。しかし、ボランティアの概念がまちまちで人によって都合がいいように使われている。今改めてボランティアについて考え、正しい概念を伝えないといけないと思う。

私がボランティアということばを聞いたのは昭和三十八年のことである「V.S」という言葉であった。もちろん青少年赤十字も知らなかったころである。夏休みに国泰寺中で行われた青少年赤十字の研修会に参加した時である。その時は何のことか全く理解できなかった。しかし、これまで参加した研修会と雰囲気違っていた。「これは何だろう。」

後で分かったことであるが加藤惣一先生の「ボランティアは人間愛の発露だよ。」のお言葉に納得。以後、青少年赤十字に関わって来たのである。今日の私の人生観の本になり、今の私が在るのだと思う。

さて、ボランティアの意味を正しく伝える方法は色々あると思うが、私の経験や人生観から、幼いときから体験を通して培っていく事が大切だと思ふ。県内の多くの幼保・小中高校が青少年赤十字に加盟登録している。賛助奉仕団は積極的に支

援し、将来よきボランティアを育てたいものだと思う。

去る九月二八・二九日に全国ボランティアフェスティバルが開催され私もある分科会に参加した。二日間にわたって熱心に討議された。県内はもちろん全国殆どの県からから社会福祉協議会を始め各種ボランティア団体から参加者があった。私も発言を求め、幼・保・小中高校に青少年赤十字の組織を活用し、人道に基づくボランティアの指導をしている。是非日本赤十字各都道府県支部に照会して理解と協力をお願いしておいた。

平成二十二年度広島県青少年赤十字賛助奉仕団総会（報告）

青少年赤十字広島県大会が十月二十三日に日赤広島看護大学で行われました。この大会終了後、会場の一室にて今年度賛助奉仕団総会を行いました。総会資料説明後、議題として次のようなことを話し合いました。

一、団費納入率の低下について

昨年度会員登録六一名中、団費納入者二六名（四三％） 退団寄付一名。そのため 今年度予算執行に支障が生じています。

二、奉仕団活動の活性化について

① 役員、役職を増やし、総会や役員会を定期的に開き、団員の意識高揚を図る。

② 機関誌寄稿を役員以外の人に積極的に呼びかけ、編集を活性化させる。

③ 賛助会独自の研修会を企画する。

平成二十二年度青少年赤十字中四国ブロック賛助奉仕団連絡協議会・研修会（報告）

副委員長 野田 崇

十月八日・九日徳島市で青少年赤十字賛助奉仕団五ブロック研修会が開かれ、中四国九県から代表が集まり、青少年赤十字の活性化を課題として各県の現状について、情報交換と意見交換を行いました。

広島県からは、日高委員長・野田副委員長・采谷会計委員の三名が参加しました。三名は、朝七時支部に集合し、山陽自動車道・瀬戸中央自動車道・四国徳島道を経由して徳島に着きました。

一三・〇〇、開会、徳島県支部のあたたかい歓迎を受けました。

一四・〇〇、日赤本社青少年・ボランティア課志波一顕課長の講演があり、本社が青少年赤十字に寄せる期待の大きさを、改めて確認できました。一五・〇〇、徳島県青少年赤十字加盟校二校（中学校・高等学校）の実践発表を聞き活発に活動している徳島県の実態が理解できました。

一六・〇〇、次のテーマで連絡協議会が開催されました。

- 一、夏季トレセン支援活動について
- 二、賛助奉仕団の組織強化及び活性化について
- 三、青少年赤十字加盟促進及び団員研修
- 四、各加盟校（幼・小・中・高）の活動充実
- 五、その他

★トレセンを開催しているが、参加者の減少や指導スタッフ不足に苦悩している（鳥取・徳島・広

④ 県内の各奉仕団体と合同研修の形で交流や意見交換をし、奉仕団活動の活性化と、J R C 活動への協力を要請する。

以上が主な話し合い内容でしたが、おしなべて、今は奉仕団員の高齢化に伴い、団員の退団とか、実働できる人が限られてきているなどの問題があります。この状況を打破して、活性化するために、上記のような案が出てまいりました。これから具体化にむけて詰めて参りますが、何よりも団員の皆様のご理解とご支持があればこそと思いますので、今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

編集後記

「賛助ひろしま」第十六号をお届けします。前号は機関誌発行が大幅に遅れ、ご迷惑をおかけしました。今回もお届けが一月になってしまいました。

できるだけ役員以外の方からの原稿を募り、団員の皆様の声をお届けしたいとの思いで、編集にあたらせていただきました。本紙についてのご意見、お気付きがありましたら、お知らせくだされば幸いです。

なお、今回は予算の関係で印刷費を大幅に節減したため、頁、形式、内容等に違いが生じていますが、悪しからずご容赦ください。

訃報

足立 龍夫（八十一歳） 平成二十一年六月
宗本 正記（八十歳） 平成二十三年一月

島）

★賛助奉仕団の高齢化に伴う活動の停滞に悩む（鳥取・高知・徳島）

★学校多忙化による加盟促進の停滞・高齢化により研修会の参加困難性（島根・岡山）

★子どもの発達段階に応じた心の連携を積み重ねながら「生きる力」を身につけさせたい。（香川・高知・愛媛）

そのような中にあっても支部や地域奉仕団との連携、他奉仕団の協力など活発な活動が行われている多くの報告があり大変参考になりました。

夜の懇親会は、和気あいあいに始まり、阿波踊りの「連」が演舞する余興のもてなしを受け、阿波踊りの踊り方を教わった。

十月九日、九時から徳島探訪に出发

探訪1 板東俘虜収容所

第一次世界大戦、ドイツとたたかった日本はドイツ兵捕虜約一千人を徳島・板東にジュネーブ条約に基づき収容所を運営しました。比較的自由に行動したドイツ兵は、日本における初めての「交響楽九番初演」「バウムクーヘン」「酪農・バター」「スポーツ・組み体操・サッカー」など西洋文明を紹介するなど市民と交流して友情を深めた歴史を知りました。元捕虜は「世界のどこに板東のような収容所があっただろう」と、語っています。

探訪2 阿波浄瑠璃・阿波十郎衛屋敷。
人形による伝統芸能「阿波浄瑠璃」を堪能しました。

昼食後、来年の再会を期しつつ広島に帰りました。（来年は、岡山開催です。広島開催は、平成十三年度です）

今後の賛助奉仕団のあり方について

委員長 日高敬司

本県の賛助奉仕団は会員の高齢化とともに長くJRCが低迷期にあったため指導者が少ないという問題点があります。そのため今後のあり方についていくつかまとめてみました。

第一は、団員が集まる機会を多く作ることにまずなにより、団員が集まることだと思います。集まっていたくためには、毎回その会合に参加して有意義であったと感じるようなものでなくてはなりません。私たち賛助奉仕団員の愁眉の関心事は健康です。青少年赤十字の実践目標にも「健康・安全」があります。その第一回の企画として、赤十字奉仕団との合同研修会を企画し、その研修において健康に関して前赤十字広島原爆病院看護部長に講演をしていただくこととしました。

第二は、役員の充実を図ること

今回の中四国賛助奉仕団連絡協議会・研修会において、徳島県賛助奉仕団の方々が役割を分担して会を盛り上げておられるのを拝見しました。先輩の方々は様々な経験や活動しておられる訳ですから、そのノウハウをこの会で大いに述べていただくことが重要だと考えます。

第三は、他の日赤奉仕団との連携を図ること

日赤の奉仕団は各地域や団体が活発に活動しておられるのを奉仕団の会合でしりました。正直いつてそれまでそのような団体があること、集まりがあることなど余り知りませんでした。各奉仕団では学校と連携をとりたいけれどもなかなかとれないという報告がありました。学校と奉仕団との橋渡

しの役割を果たすことも私たちの役割ではないでしょうか。別項で横田二郎さんの記事がありますが、これは大変参考になると思います。

第四は、情報を広く発信していくこと

この機関誌は年に一度ということになっていますが、上手にすれば余り費用をかけずに発行することが出来ます。そこで、団員の随想、短歌、俳句、趣味に関することなど幅広く掲載したいと思っています。また、小・中・高校生の活動や海外派遣（韓国・インドネシア青少年赤十字との交流など）も広く掲載し、幅広いものとしたいと考えています。

以上の方針に基づいてより幅の広い活動を進めていきたいと考えています。

青少年赤十字に想う

横田二郎

「地域に青少年赤十字に輪を！」と、東広島市赤十字奉仕団（平成六年結成）の分団として「東広島市赤十字ヤングボランティア」が、平成九年に発足して十三年を迎えました。当初、地域の幼児・児童・学生をはじめ二十五歳以下の青少年三十名が加入して活動を始めました。

以来、活動を続けてきましたが、平成二十年度には、奉仕団が分団を含めて「モデル青少年奉仕団」として指定（三年間）を受けることとなりました。

「モデル奉仕団」としてのテーマは「東広島市における青少年赤十字の協働態勢の構築」で、日本赤十字社広島県支部東広島地区との協力のもとに、東広島市内の青少年赤十字関係者間の連携を

図り、地域の関係諸機関・団体等の協力を得て、「青少年赤十字の協働態勢」を構築することにより、「気づき」「考え」「実行する」態度を身につけた青少年の育成に努め、地域社会・学校等への「青少年赤十字の理念」の浸透に資する、という大きな目的を掲げてまいりました。（少し大上段にかざしすぎた観がありますが）

このグループはJRCとは異なっており、一般地域に在住する青少年を対象にしていますので、団員の勧誘には大きな努力を払わなければなりません。それだけにJRC等との連携を密にしていこうことが肝要と考えて参りました。そこで、まず東広島市内のJRC加盟校を歴訪し、お互いの意見交換をし、活動の現況を知り、連携への道を求めることにつとめました。

具体的な連携ないしは協働に至るには難しさがありました。先ずは、「東広島健康福祉まつり」における「青少年赤十字展」への高校JRC部員の生徒さんの協力を得ることができました。県立西条農業高等学校・県立黒瀬高等学校のJRCの生徒さんが積極的協力くださり、一般市民との交流・対話に努めていただきました。

また、「青少年赤十字交流研修会」を実施、JRC加盟校の生徒さんや県立賀茂高校生徒会執行部の生徒さんの参加を得て、ビデオ鑑賞・日赤県支部角田敦彦さんの講話をもとに研修、相互の意見交換を行い、ボーリングで交流・親睦を図ることができました。

さらに、東広島市児童青少年センターの「ゆーすふる・チャレンジャー」等とともに、「救急法」について研修し、地域の青少年との交流を図ることができました。「青少年ボランティア基礎研修

会」においては、熊野町青少年赤十字連絡協議会の会長近藤博文熊野第三小学校長先生などから、「熊野町における青少年赤十字への取り組みについて」の講話をしていただき、地域における青少年赤十字の態勢強づくりについての示唆を与えていただくことができました。

こうした活動に当たっては、日本赤十字社広島県支部・同東広島市地区、東広島市教育委員会等のご理解とご指導ご協力をえましたが、今後とも地域の関係機関との連携をいっそう大切にしていかなければならないと思っています。

また、奉仕団に当っては団員間に「青少年赤十字に対する意識に多少の格差のあることを考慮しての具体的な対話と活動への意欲の喚起にも意を馳せることも忘れてはならないことのように思っています。

今後とも、JRC等との具体的な交流・連携に努め続けることによって、少しでも協働態勢の構築へと近づきたいと思えます。

先輩を訪ねて

河戸靖子

「やあ待っていたよ。今日は藤袴と桔梗と秋の花を持ってきてくれたんだね。君、秋の七草を書いてみたまえ」大先輩の森田先生のテストが今日も始まる。「えーと、萩、桔梗、薄、撫子、藤袴、葛、女郎花」と書く「ああ、よく書けた」とにっこりなさる。毎回この調子で植物の話題が弾む。森田寛先生は、現在東広島市の新生園でくらしをいらっしやる。

同じ先輩でも、田中光枝先生は庄原市内にお住まいなので、時々おたずねして、青少年赤十字活動の昨今を話し合う機会を持っている。

しかし、森田先生が東広島市にお住まいと知ったのは、私が加盟校に「子ども俳句と俳画」の指導に伺っていて、ふとした機会に同市におられると知り、最近の青少年赤十字活動のニュースをお伝えしたいと思い、毎月お訪ねするようになったのである。

最初は青少年活動の方々と、イタリアのソルフェリーノ、アンリ・デュナン記念館、スイスのジュネーブ赤十字本部、ジュノー博士のお屋敷等を訪ねた旅をしたので、その報告に伺ったのであった。森田先生は身を起こして、私の写真に見入ってください、次回にお訪ねしたときは、ご自宅からお取り寄せになった写真帳（先生が団長として「赤十字の旅」をなさったときの）を示して、楽しそうに説明してくださった。

こうして、毎月の訪問が始まり三年が過ぎた。先生はラジオで音楽や政治情勢を常に聞いておられ、いつも青少年赤十字の将来について厳しい意見を述べられる。トレセンの講義をお聞きしていた頃と全く変わらない。情熱を込めて話され、私一人が聞くのはもったいなくて皆様にも聞いてほしいと思っている。

また、理科がご専門とお聞きし、毎回私が加盟校で俳句の授業をした教材の季節の花を持参すると「絵に描け」とおっしゃるので短冊に俳画を描いて持参している。先生はその絵にあわせて「その句には『信』、朝顔には『望』、柿には『愛』と字を書いてくれるか」とおっしゃるので、ご下命の字を書き、その下に「寛」の銘の落款を押す。

落款は庄原市教委の宮本仁先生が掘ってください。かくして二人の合作の短冊ができあがると大切な方々に贈っておられる。私のつたない絵や字がお役に立てていただけで、うれしい。

先生にこの記事を書く許可をいただいたとき「皆様へのメッセージを」と申し上げると、「大和町のトレセン会場のデュナンの石碑にあった言葉をぜひ」とおっしゃった。念のため現地に行くと、植樹した紅葉の下デュナンの碑には「気づき、考え、実行」と記してあった。次回に森田先生に報告すると「うん、それだ！それこそが皆さんへの一番適切な言葉だ」と満足そうに頷かれた。

「気づき、考え、実行する」この言葉を大切に、私は今後も訪問を続けたい。

広島・インドネシア青少年赤十字国際交流事業始まる

いままで韓国とのJRC交流事業が続いていますが、今年度から表題の新しい事業が始まり、インドネシアへ男女各一名の生徒が派遣されました。それに先だって、本社主催の「国際交流事業」に二十五カ国からJRCメンバーが集まり一週間の交流と各県での研修が一週間あり、本県へはインドネシアの生徒が二名来広しました。二名は広島市内見学・研修及び広島新庄高校へ二日間滞在しました。